

朴一昊 教授指導
碩士學位請求論文

遠藤周作の『深い河』論

2006

誠信女子大學校 大學院

日語日文學科

楊貞熙

遠藤周作の『深い河』論

朴一昊教授指導

이 論文을 碩士學位論文으로 提出함

2006年 5月

誠信女子大學校 大學院

日語日文學科

楊貞熙

認 准 書

楊貞熙의 碩士學位論文으로 認准함.

審査委員 _____ 印

審査委員 _____ 印

審査委員 _____ 印

誠信女子大學校 大學院

論文概要

소설이 허구의 산물이라고는 하지만, 그 안에는 분명 작가의 현실적 체험이나 사상이 녹아나 있다. 한 작가의 작품을 형성하는 본질적 요소가 환경적 영향이라는 사실에서도 알 수 있듯이, 이러한 영향은 의식한다고 해서 구축되고 의식하지 않는다고 해서 의식 속에서 소멸되는 것은 아니다. 엔도슈사쿠(遠藤周作) 역시 이러한 원체험적 영향이 작품 속에 반영되어 있다고 하겠다.

따라서 본고에서는 어린시절 이질적인 거리감에서 시작된 종교를 일생 문학이라는 매개체로 변용시켜 받아들인 사실에 주목하여, 그의 원체험인 환경적 사상적 영향관계를 중심으로 생각해 보기로 하였다.

또한 엔도가 카톨릭 신앙을 가진 일본의 문학가라는 입장에서 자신의 문학을 창작한 것이라 보고, 엔도의 많은 작품들 중 소설 『깊은강(深い河)』을 텍스트로 하여, 그 안에 반영된 작가의 내면적 인식(원체험의 영향)을 문학의 주제와 연관시켜 분석하고자 한다.

일생을 통해 신앙의 문제를 일관된 모티브로 추구해 왔던 엔도는 작품 『깊은강(深い河)』을 통해, 다양한 종교에 공통하는 본질인 「전생」 「동반자」 「모성적신」 「구원(영원)」 등과 같은 문제를 논한다. 소설 속의 주인공들은 이러한 각각의 과제를 가지고 등장하지만, 그 과제는 모두 작가 자신 속에서 오랜 시간 중요한 의미를 가져왔던 것이다.

엔도는 『깊은강(深い河)』속에서 종교의 종파를 초월하여 인간의 생과 추함과 슬픔, 선과 악이 혼재한 우리들의 모든 것을 포용하는 신

의 모습을 추구한다. 그 대표적 상징으로서 엔도는 ‘겐지스강’을 「모든 사람을 위한 ‘깊은 강」의 상징으로서 나타낸다. 이 성스러운 구원의 강은, 불변적인 인류의 구제의 강으로서의 사랑의 상징이 되고 있다.

이 작품을 통해 엔도는 신앙에 대한 동양과 서양의 견해의 차이를 조명하는 것을 시작으로 하여, ‘신’을 우러르는 대상이 아닌 인간과 가깝고 한없이 온후한 사랑이 넘치는 신으로서의 모습을 찾고 있다고 하겠다.

이와같이 엔도는 문학이라는 매개체를 이용하여 유일신을 갖지 않은 ‘일본’이라는 풍토속에서, 서양의 신의 모습을 일본인의 입장에서 추구하는 자신의 작가관과 종교관을 작품 『깊은강(深い河)』 속에 담고 있다고 할 수 있겠다.

目 次

論文概要

I. 序論	2
II. カトリック文学者としての遠藤	
1. キリスト教についての距離感	7
2. カトリック文学者としての姿勢	12
3. モーリヤックの影響	16
III. ガンジスへの旅と『深い河』	
1. 理想の形象化	20
2. 新しい道	25
IV. 『深い河』の中のカトリック	
1. 汎神論と汎在神論	29
2. 死の再解釈	37
3. 同伴者としての姿	42
4. 愛の母としての存在	47
5. 永遠への道	50
V. 結論	55

参考文献

ABSTRACT

I . 序 論

生涯をかけて信仰の問題を一貫したモチーフとして深く追いつけた遠藤は、「西洋と日本」「唯一神と汎神論」「神と人」などを文学の主なテーマとして、自分だけの宗教観を取り入れた『白い人』『沈黙』『深い河』など、多くの作品を発表した。

そのうち、『深い河』¹⁾は、遠藤の最後の小説として注目され、発表直後、「著者の信仰の深化が託されている作品」²⁾、「遠藤の念願であり、目標でもあった、日本人に理解され、受容されるキリスト教を、真に普遍的な母なる宗教として「グローバル」(根元的)な視点から描いた作品」³⁾等のごとく、様々な評価が行なわれている。もちろん、「たしかにこの<最後の小説>に、かつての『沈黙』などの緊迫感や迫力は乏しい」⁴⁾という批判もある。

このような評価の根底には、遠藤が登壇初期から「信仰」という特殊なテーマを持って、それを積極的に作品の中で形象化してきただけでなく、評者との活発な論戦においても、信仰についての立場を明確に示した作家であるという認識があるといえよう。このような文学活動が遠藤に他の作家との弁別性を獲得させたのではないか。

遠藤の初期作品で表された「東・西洋」「日本的思考とキリスト教」の対立と葛藤は、初期作品にだけ見られるのではなく、一貫した主題をもって老年期に至るまで発表してきた作品の中で、生の虚無や限界を超越して死の世界まで包容し深化・和合された。

これは「一日一日、自分の人生が終りに近づきつつあることを感じない日はない。」⁵⁾「万病一身に集り、余命の少きを感じる。」⁶⁾という七十歳をむかえた著

1) 遠藤周作『深い河』(講談社、1993)以下、本文の引用は頁だけ示すことにする。

2) 遠山一行「書評『深い河』」『週刊文春』第35巻第29号(文芸春秋社、1993)131頁。

3) 三木サニア「遠藤周作『深い河』論—復活と転生をめぐって」『久留米信愛女学院短期大学研究紀要』第17号(久留米信愛女学院短期大学、1994)105頁。

4) 佐藤泰正「『深い河』再読」『キリスト教文学研究』(日本キリスト教文学会、1999)46頁。

者の日記の内容のように、死を前にした心を見せているからであろう。これについて笠井秋生は「『深い河』は遺書的性格を持った作品だと言っていいかもしれない」⁷⁾と語る。

遠藤自身も、この小説について、『「深い河」創作日記』で、「この小説が私の代表的になるかどうか、自信が薄くなってきた。しかし、この小説のなかには私の大部分が挿入されていることは確か」⁸⁾と述べている。遠藤が『深い河』の中に自身の大部分を挿入したというのは、この作品が、彼の最後の作品として彼の「日本人の心に合うキリスト教」というテーマを表出しているからであろう。

これについて田中佐二郎は、「遠藤文学の特質といえば、キリスト教的な神の愛であるが、年輪の深まりとともに力みや気負いが消えて、より遠藤的になり定着したという感がある。時代はバブルが崩壊し、企業等でリストラが叫ばれ、人の眼があらためて内面的なもの一心に向けられつつあるという。『深い河』がより遠藤的になったとすれば、求心性がより増したということになる」⁹⁾と述べている。

従って、『深い河』も、今まで遠藤が文学の中で追い求めてきた、多様な宗教に共通する本質としての「救い」「神と愛の探求」「復活（転生）」などの問題を論ずる作業の一環であったことには間違いない。

『深い河』は「聖なる河」のガンジスへ旅する話から始まる。ガンジス河を

5) 遠藤周作『「深い河」創作日記』（講談社、2000）45頁。

6) 注5)の前掲書 123頁。

7) 笠井秋生「『深い河』の作中人物」『キリスト教文学研究』（日本キリスト教文学会、1999）53頁。

8) 注5)の前掲書 115頁。

9) 田中佐二郎「『深い河』（遠藤周作）を読む」『かながわ高校教育の研究』（かながわ高校教育、1994）116頁。

背景として作品を書いたという事実はさまざまな面で注目を要する。『深い河』の舞台がどうしてキリスト教のヨルダン川ではなく、インドのガンジス河であるのか。

その理由について遠藤は、ヨルダン川では、ガンジス河のように母のイメージと救済のイメージを探ることができなかつたからであるという¹⁰⁾。母なる神を求めている東洋人にとって、ヨルダン川は自然までも包容する父のイメージ、そのものであったことである。

『深い河』において根幹をなすのは、神をもたない日本という風土の中でキリスト教の「神と愛」をいかに受け止めながら生きていくべきかを、日本人の立場で問い続けることである。

小説の中の主人公たちはそれぞれの「課題」をもって登場するが、その課題はいずれも作家自身の中で、長い間、大切な意味を持つものとして、遠藤の一生の関心の対象であった。

本稿の目的は遠藤の多くの作品の中で、『深い河』に現われた多様な内面的な認識を彼の宗教観と連関づけて分析することで、作家が一貫して追い求めてきた理念や所信の実体を明らかにするところにある。

現世的な生の虚無や限界を超越して、死の世界まで包容しようとする意志を見せた作家として、人間のための宗教を探っていた話頭は、遠藤が作家として登壇して以来、作品活動の中心テーマであった。

遠藤によって強調された「人間の救い」は来世と現世の区分が認められず、すべて同等な比重を持つ。キリストの姿さえ、神聖な存在というより、人間の姿として把握されており、そのような意図は『深い河』でもっとも顕著である。

遠藤は『深い河』を通じて自然と人間の合一を試みながら、死と和解するポーズを取る。これは作家が自分の信念や宗教観または民族観をそれなりに涉

10) 遠藤周作「ガンジス河とユダ荒野」『遠藤周作文学全集』12（新潮社、2000）

猟した後に出会う超越的な話頭、すなわち自然へ帰依して死を超極したいと願う人間の意志を集中的に表わしているのである。

上述したように遠藤の小説は、作家自分の内面的な変化と共に多大な変化を示してきた。そこで今まで遠藤文学の本質を究明しようとした研究は主に「東西洋の葛藤」、「遠藤にとって神の問題」などのカテゴリーに集中してきた。

しかし、そのように一般的なカテゴリーを持って遠藤の小説を裁断する接近法は、論理的に劃一性または制限がある。これを乗り越えるためには論議をより深化させなければならない。

従って、本稿では遠藤文学の代名詞のように称えられるいくつかの概念の背景に、どのような問題点が残っており、それが遠藤の作品生活全般にどのような影響を及ぼしてきたのかという点を究明してみたい。そして、遠藤が異質的な距離感を覚えたキリスト教を、一生、文学という媒介体によって変容させ受け入れた事実に注目して、彼の原体験としての環境的・思想的な影響関係を考えてみたい。さらに『深い河』の中に貫流している作家の内面的表象を、作品分析を通じて考えてみたいと思う。

本 論

Ⅱ．カトリック文学者としての遠藤

1．キリスト教についての距離感

心理学者アルフレート・アドラの指摘によれば、「幼い頃から記憶されている事件は、その個人の主な関心に結び付いて、その人の人生のスタイル」¹¹⁾を決めるところに様々な影響を及ぼすという。そこで、アドラは人間の深層心理を理解することによって、その人間心理の全人間性を認識することができるという。

遠藤にとっても幼い頃から記憶されていた事件は、遠藤の生において主な関心と非常に近くて密接につながっており、その関心が、人生を生きて行くスタイルを決める一番重要な要素になったといえよう。これが創作的なエネルギーとなり、遠藤の作家的な生涯に重要なモチーフとして落ち着くようになったのである。

それでは、どのような動機と原因によって「神と人間と日本の特性」が遠藤の精神的な核心として掘り下げられるようになったのか。ここには遠藤の成長背景と、それによる宗教認識の解明が必要であろう。

幼い頃、母親によって教会へ連れて行かれて本人の意志ではない洗礼を受けさせられた遠藤に、信仰というのは自分の身体に合わない洋服であった。

キリスト教というのは、私にとっては身によく合わない洋服なのです。私はみそ汁とたくあんが食べたいのに、向こうがバタクさい食べ物をよこすので、放り出してしまおうというような感じだったのです。¹²⁾

11) Alfred Adler, *What life should mean to you*, Little Brown, 1931

12) 遠藤周作『私にとって神とは』（光文社、1983）11頁。

遠藤は自分の手でキリスト教を選んだ自発的な入信ではなかったので、幾度もこの洋服を脱ぎ棄てようと考えたが、脱ぎ棄てられなかった。その理由について遠藤は、「代わりに着るものを私が持っていなかったためであり、今一つは母にたいする愛情や、母が着せてくれた基督教のもつ力のためである」¹³⁾と記している。遠藤は母親がくれたこの洋服を、自分の身体に合う和服に仕立て直してみようとするようになったのである。

受動的で見慣れなかった信仰について、少年時代には「キリストは何故、西洋人の顔を持っていたのだろうか」¹⁴⁾という程度の認識をもっていた。

ところが、成長後、信仰そのものについての動揺や悩みを持ち始めた遠藤は、キリスト教そのものにも懐疑を抱くようになった。自分の心の奥で基督教の教えが自覚されていなかったということと、元のキリスト教とは相反する何かの感覚がかくれているということに気づいたのである。

大学卒業後、フランスでの2年半の留学生活は、遠藤にとって異国人として持つ距離感と、自分が西洋宗教の基督教を与えられた日本人であるという事実を自覚させた。

古屋健三はこの留学生活について、「西洋が異質で、独善的・閉鎖的であっても、そこから離れることはできない。なぜなら、西洋は正統であり、根源だからである。こうした考え方の根本にあるのは、もちろん氏が信ずるカトリックであろう。カトリックが普遍的な思想であると信じていたのに、もっとも西欧的な思想であったというこの距離の発見が氏の留学のポイントといえ、いえるからである。従って氏が棄教せず、しかも日本人でありつづけるかぎりには、どうしても異端にならざるをえない。」¹⁵⁾と説いた。

13) 遠藤周作「私の文学」『遠藤周作文学全集』12(新潮社、2000)377頁。

14) 遠藤周作「私とキリスト教」『遠藤周作文学全集』12(新潮社、2000)305頁。

15) 古屋健三「遠藤周作における留学の意味」『遠藤周作の文学世界』6月号(国文学、1975)

遠藤が覚えた「日本人として自分の宗教感覚と西洋のキリスト教との対立」は、遠藤自身に信仰の矛盾という問題としてせまってきた。西洋のキリスト教的な伝統や文化や生活感覚などが西洋のどこにも染み込んでいたという事実は、そのようなキリスト教の伝統も感覚もない日本人の遠藤には衝撃であった。

遠藤はキリスト教が西洋から日本に伝わって以来、日本人たちがキリスト教から離れていった理由について、西洋のキリスト教の中には日本人の感覚に合わない何かがあったのではないかと考えた。

それについて遠藤は次のように記している。

基督教と相容れない日本人の感覚と私は今申しましたが、それは大別すると神にたいする無感覚、罪にたいする無感覚、死にたいする無感覚と申し上げることができましょう。16)

遠藤は、西洋とは違って日本人が持っているキリスト教についての本能的な距離を、日本人が伝統的に抱いてきた「神についての無感覚」が原因であると考えた。

- (一) 生贄という観念は、日本人の感覚には薄いこと。
- (二) 西欧基督教における神と人間との存在関係の教義が、日本人の深層心理にはつかみにくい点。
- (三) ユダヤ教、基督教の神のなかの裁き、罰し、怒りの顔は、日本人の宗教意識には向いていないこと。17)

34頁。

16) 注14)の前掲書 306頁。

17) 遠藤周作『キリスト教』(三省堂、1993) 10~14頁。

遠藤は、人間のすべての罪を背負って十字架にかかって死んだイエスに「動物や人間を捧げる」¹⁸⁾という(一)の感覚は、日本人にとってあまりに辛く、どうしても距離を持ったのは当然であろうと述べている。

また、遠藤は「神と人間」との関係についても西洋との差を指摘する。キリスト教では両者の関係を「完全な存在の神と不完全な存在の人間」と定位する。

しかし、日本では「神と人間」の区がない。日本人に神とは、裁き、罰し、怒りの顔を持つ神ではなく、人間と親しい同伴者としての姿を持っている存在である。そこで、唯一神のみを仕える西欧のキリスト教が「神と人間」の区がない日本の精神風土の中で険しい道を歩いてきたと遠藤は考えた。

遠藤は「西洋と日本」における神の概念の差に対して次のように定義する。

キリスト教をもっている西洋人にはよしや神や教会を否定するにせよ、その神というものを念頭から離すことができないのだ。つまり彼等の無神論できえも、常に神を前提としてなりたっている。神があるかないかという問題の後に神を否定した無神論である。だが日本人にはこのような無神論はない。あるのは神の存在にたいする無関心、無感覚である。つまり神があってもなくてもどうでも良いという無関心が日本人の心には強いように思われる。一言でいうと、日本人の感覚の中には神を必要としないものがひそんでいる。¹⁹⁾

日本の汎神論的世界観では「神と人間と自然」との区がない。仏教

18) 注17)の前掲書

19) 注14)の前掲書 306頁。

の仏も人間として仏になっており、韓国の天道教の人乃天思想もヒューマニズム思想が中心である。日本(東洋)宗教の核心は、神が中心ではなくて、人間そのものが中心になるところであろう。日本人にとって神についての概念はこのように西洋のそれとは違う。

遠藤が神についての認識の有無の問題を語るところにおいて、その認識は西洋の教養によって与えられた知識としての観念であった。西洋人のように生活の中で神を認識したのではなかった。汎神論的世界観を持っている日本人に、唯一神のみを信じて盲目的に従わなければならないということは当初から無理であろう。

遠藤にとって西洋の唯一神的思考は日本人として距離があって、「どのような形としてカトリックを理解するか」が遠藤の内面では大切な問題になってきた。彼はこのような内面の問題を小説の中で表出させた。

遠藤の特徴は、キリスト教についての距離感を作品の創作のモチーフとして昇華させたという点である。それは自分の存在を明らかにすることに関わった大切な問題であったからである。

‘日本におけるキリスト教’と‘日本人にとっての神の存在’。

これらは遠藤の文学の主なテーマであり、両者の意味が遠藤にとって切実な問題意識になっていた。それが『深い河』の中にも投影されている。

2. カトリック文学者としての姿勢

作品の中で作家によって再現される世界は、作家の実際の世界を投影されたもので、その実世界は作品そのものを豊かにする。遠藤はキリスト教徒としてキリスト教に対しての距離を持つ日本人という事実を覚えながら、作品を通して自身の意識世界を形象化させた。

キリスト教がヨーロッパではすべての評価の根本をなす思想の一つであるということを知った遠藤は、大学時代、雑誌「四季」に評論「神々と神と」を発表しはじめ、「カトリック作家の問題」（三田文学）など、唯一神論と汎神論をめぐる評論を書きながら、信仰という主題を自分の文学のテーマとして表した。

遠藤は自分がカトリック信者になった理由について、加賀乙彦との対談で「何かの宗教を選択するということは、文化的な伝統とか環境とかの中で自分の宗教を選ぶのが普通だと思う」²⁰⁾と語っている。インド人がヒンズー教を選びヨーロッパ人がキリスト教を選ぶというのは、言語が違うのと同じように、文化的伝統とか環境とかの違いによってそうなってしまうということである。それは当人の責任ではなくて、神がいくつもの顔を持っていて、自分は日本という国でたまたまカトリックの家に育って、それによってカトリック信者となってしまったというのである。これは自分の意志でこのキリスト教を選んだのではなかったということである。

いくども棄てようとしても棄てられなかった信仰について遠藤は、一生、文学を通じて自分だけの世界を具現する。遠藤は作家としての自意識と役割を認識しながら、カトリック信者である日本人として自分だけの世界を構築する道を辿った。

20) 加賀乙彦と遠藤周作「最新作『深い河』一魂の問題」『国文学』（学燈社、1993）18頁。

「日本的感性の底にあるもの」というエッセイの冒頭に遠藤は「基督教徒であり、日本人であり、しかも作家である私には、いつもこの三つの条件の関係、その対立が念頭にある。三つの条件は残念なことには未だ私の裡で調和、統一されず、むしろ多くの場合に矛盾をしめすのである。悪の世界から身をまもらねばならぬキリスト者としての義務と、人間の悪の世界にも敢えて眼をむけねばならぬ作家としての義務と矛盾を、私は今日まで「カトリック作家の問題」その他の評論で考えてきた。」²¹⁾と述べている。

遠藤はカトリック作家として「宗教と文学」について、「カトリック者の本来の姿勢は、東洋的な神々の世界のもつ、あの優しい受身の世界ではなく、戦闘的な、能動的なものです。彼が闘い終って、その靈魂をかえす時にも、神の審判が待っています。永遠の生命か、永遠の地獄かという、審判が待っています。カトリック文学とは、こうした人間の戦闘や、歓喜や、苦悩を描くものです。しかもカトリック文学は、文学である以上、その重心を人間におくのであって、決して天使や神におくのではない。」と見て、「人間は神をえらぶか、捨てるかの自由をもっている存在である。この人間の自由を文学に賭けるのが、カトリック文学です。」²²⁾と定義する。

従って「人間を凝視することを第一の目的とする」²³⁾カトリック作家は、「カトリック作家である以上は何よりも人間を凝視するのが義務であり、この人間凝視の義務を放擲する事はゆるされない。」²⁴⁾と遠藤はいう。

これは作品の中における汚れた人間と悪の世界についての描写が、読者の魂を罪に誘わないかという苦悩と関わる問題である。カトリック作家として遠藤の

21) 遠藤周作「日本的感性の底にあるもの」『遠藤周作文学全集』12（新潮社、2004）300頁。

22) 遠藤周作「神々と神と」『遠藤周作文学全集』12（新潮社、2004）23頁。

23) 遠藤周作「カトリック作家の問題」『遠藤周作文学全集』12（新潮社、2004）24頁。

24) 注23)の前掲書 24頁。

奥で「カトリック的良心と作家的良心との対立」が遠藤の中でいつも戦っていたのである。

形式において、宗教は賛美して祈りを捧げながら帰依するが、文学は思索・想像・創造(表現)するのである。そして、その内容において、宗教は発見・体現する神に対して服従し信心と共に帰依するものが、文学は自分を通して新しい神を探し求めるものである。

唯一神をもたぬ日本という風土の中でカトリック信者でありカトリック作家である東洋人の遠藤は神をいかにうけとめ、いかに生きるか、そしていかに日本人として文学の中で方向を提示するかという苦悩を持ったざるをえなかった。

「一つの作品が持つ一番明白な原因は、その創造者、すなわち作家である。そのゆえに作家の個性と生活による説明は文学研究において最古及び最良として確立される方法の一つになっている。」²⁵⁾

上のような観点から見れば、遠藤は多くの作品を残しておくことで「文人としての自分と実際の自分」の姿を緻密に定立させてきたといえる。

遠藤の場合、自然性と人生の形成原理が小説の中で拮抗するということは注目すべきである。

遠藤にとって「小説」とは、長い間、キリスト教徒として生きながら感じてきた自分の宗教観を表現するものであった。これは受動的な信仰に対する積極的な模索の方法であった。彼はカトリック信者でありながら、日本人(東洋人)としての自分のアイデンティティーを守って行くことがいちばん重要な課題であると思い、それを真面目に作品に具現していった。つまり、彼は作品をもって自分の宗

25) Rene Wellek, Theory of Literature, Penguin Books, 1978

教観を表明し、自分の文学精神の高揚を追い求めたのである。

なお、上のような遠藤の文学的態度の背景にモーリヤックというカトリック作家からの影響があったことは看過できない。次章ではモーリヤックとの関わりを中心に考えてみたい。

3. モーリヤックの影響

遠藤のキリスト教文学を理解するために、モーリヤックとの関連性を扱うのは大切である。ここではその影響関係を注意して見ることにする。

自分と同じようにカトリック信者であり、カトリック作家であるモーリヤックについて遠藤は『カトリック作家の問題』で、「カトリック作家の問題をだれよりも身をもって苦闘したカトリック作家の一人は何といてもフランソワ・モーリヤックでしょう。」²⁶⁾と記している。

モーリヤックは、作品の背景や題材の大部分を自身の故郷のボルドー地方の風物、古い伝統や因習に閉じこめられた家庭生活に取り、人々の生活を通して人間心理を観察する。彼は小説の中で「罪を犯す肉身と償う信仰」を対立させて、「自然と恩寵」「個人と家庭と信仰」との葛藤などを主なテーマとして扱っている。

モーリヤックの小説は、絶えず緊張した雰囲気の中で展開するが、その中で特に遠藤が愛読したのは陰鬱で峻厳な心理ドラマである『テレーズ・デスケール』である。

小説は、テレーズが夫を殺そうとした疑いで裁判にかけられている場面から始まる。自分の夫の毒殺を計ったテレーズは、家の体面をなによりも大事に考える夫の偽証によって免訴になった。そして帰宅したテレーズは家族によって幽閉生活を強いられて、絶望的な孤独の中で自分の心の奥の深淵を凝視する。

テレーズは本当に「殺し」を意図したのであろうか。

彼はそのコップを一気に飲みほした。

26) 注23)の前掲書 25頁。

暑さで頭のぼうっとなっていたテレーズは、薬がいつもの分量の二倍になっていることを彼に知らそうという気にならなかった。27)

高橋たか子は「テレーズは、夫が砒素がまじった水薬を飲みすぎた姿をただ見ていただけ、すこしも意識的ではなかった」と説く。一方、医者が来た時、何も言わなかったテレーズについて、高橋は「彼女の無意識のなかにあったものが、なかば意識の微光をあびて徐々にでてきたのである。彼女は何日もすぎてから積極的な行為をするようになるが、その行為にいたるまでには、意識と無意識の境目のような気分が、間伸びしたようにながながと続くのである。」28)と説く。

高橋が強調するのは、この「無意識の罪」である。これは「一般になにか行為として罪を犯せば、当然社会から罰せられる。ところがキリスト教では、罪を心のなかで思い描いただけでもそれは罪なのである。このことをさらに極限まで押しすすめていけば、すこしも自分は気づかずに、無意識のなかにすでに罪は存在しているという考えが成りたつ。」29)ということである。このようなキリスト教の「罪」について拒否感を感じた遠藤は、自分の意識と西洋の「罪」の概念との差を次のように記している。

「むしろこの神にたいする無関心さはもともと東洋的な宇宙観や東洋的な汎神論から来ているようであり、日本人には長い間、ぬきがたいほど培われてきたものだと思われました。神を必要としない日本人はまた罪の意識の点でも基督教と相反する感覚をもっています。わたしは日

27) François Mauriac, Thérèse Desqueyroux, Shinasa, 1995

28) 高橋たか子「モーリアックと遠藤周作」国文学 2月号 (學燈社、1973) 112頁。

29) 注28)の前掲書 112頁。

本人には罪の意識がないとは決して断定はいたしません、しかし罪にたいする反応が西欧人と我々日本人とは非常にちがうことは認めざるをえません。（中略）少なくとも日本人の感受性からみると基督教が教える魂の死としての罪の意識があまりにも極端なもの、余りに重くしいものにうつるのではないかと思っています。」³⁰⁾

日本人の道德観念で「ツミ」のイメージというのは、基督教の言う罪ではなく、穢れか、人生を生きる上での苦しみのことだと思います。基督教で言う罪というのは、簡単に言ってしまうと、自分が神になるか、あるいは神による救済を絶望することです。³¹⁾

上のように善と悪を極めて厳しく区別する西欧の考え方に抵抗を覚えた遠藤は、ヨーロッパの基督教に疑いを抱いた。そこで、彼は犯してしまった悪行にも救済の契機が潜んでいるということを暗示したモーリヤックの作品から慰めを得ることができたのである。

ところで『テレーズ・デスケール』が暗い罪だけを描写しているにもかかわらず、なにゆえキリスト教的な作品としてあるのか。

それは高堂要がいうように、「虚無に打ちひしがれた者、悪の快感に酔い痴れようとする者、神の秩序を破壊しようとする者を描くことにより、その対極にある神の存在を摸索しようとしているのではなからうか」³²⁾と考えられる。

作品の中においてモーリヤックは、人間の内面を執拗に分析しながら人間の

30) 注14)の前掲書 306~307頁。

31) 注12)の前掲書 141頁。

32) 高堂要「遠藤周作における弱者の論理」国文学 解釈と鑑賞 6月号 (至文堂、1975) 81頁。

暗部と苦悩を描き、神の恩寵を暗示する。作品の中でテレーズの救いが直接的に描かれなくても、最後に陽光の降り注ぐ道を歩くテレーズを通じて、その余白の世界こそ信仰者のモーリヤックが「テレーズ」を彼自身の手から神の恩寵にゆだねる部分である。この作品の核心は罪悪・恩寵・救済といえよう。このような方法と創作態度は遠藤周作に多くの影響を与えた。

遠藤の文学において基本的な三つの要素は、「神と人間と日本的思考」である。遠藤の主要作品は、「人間と神」の関係を主題としながら、「日本的思考」が状況的な条件として関与している。

遠藤は実際に作品のなかで弱者を登場させながら、弱者に救援の手を伸ばす神の姿を切に求める。このような「恩寵(救い)の暗示」という作品の構成的形式の面で、モーリヤックから受けた影響は大きいといえよう。

遠藤は「文学とキリスト教との関係」についてモーリヤックに学んだといえる。しかし、フランスというキリスト教的な伝統のある国で生まれたモーリヤックの考え方は、日本という国で洗礼を受けさせられた男の思考と必ずしも合致しなかったものであり、その時にモーリヤックとの距離を持ち始めた³³⁾と遠藤は述べている。遠藤はキリスト教の歴史も伝統もなく、唯一神という信仰もない日本的風土の中で、日本人の感覚にはキリスト教を受け入れられない何ものかがあるのだと考えたのである。

このように遠藤は、日本の固有な感覚を自分の中で見出しながら、自分の方式（恩寵を暗示するモーリヤックとは対照的に、遠藤は救いを直接的に表す）によってさらに深く発展させていった。

33) 遠藤周作「モーリヤックと私」『遠藤周作文学全集』13（新潮社、2000）80頁。

Ⅲ. ガンジスへの旅と『深い河』

1. 理想の形象化

サルトルの表現によると、作家というのは「あるものなどを言うのを選択したために作家であるのではなく、まさにその事物を〈どのような方法で〉言うことを選択したために」³⁴⁾作家である。

すべての文学ジャンルの中でも、特に小説は作家の個人的な生を土台として表す精神的な産物という点で、その作家の伝記的な生涯と密接な関係を持っているといえよう。結局、我々が作品の主題または作家意識を探るといのは、「作家が自分の作家的な生涯にかけて、言っているのは何か」を探して行くことと同意になる。

そこで、作家の作品世界を何うというのは、その「作家の個人的な生に通じる思索の土台の上に、どのような新しい世界を作りあげたのか」を考察することである。

遠藤の作品において多くの部分が幼い頃の記憶とともに、キリスト教に対する絶望の体験と関わっている。エデル・レオンの「芸術というのは、決して静けさの結果ではない。むしろ緊張と熱情から、言わば芸術家自身の精神が不安定な状態にある時、それはほとぼしるのである」³⁵⁾という指摘のように、遠藤にとってキリスト教の世界にあった成長期の経験と思考はむしろ作家的な力量を高揚させるエネルギーになったと考えられる。

従って、「批評は芸術作品自体だけではなく、創作の過程及び靈感を受け

34) J.P Sartre, Qu'est-ce que la littérature?, Galliamrd, 1948

35) Edel Leon, Literary biography, Hart Davis, 1957

る作家の精神状態にも関心を傾けなければならない」³⁶⁾というハーバートの指摘は、「作品の成果そのものだけ集中的に関心を傾けたあげく、その作品の背景を成す作家の内面の動きとその影響に対しての観察を逃してはいけない」という意味として理解することができる。

作家によって作られた作中人物は、結局作家の内面に隠れていた自我の一部である。そこで遠藤の『深い河』の人物は作家が形象化させた焚身であるといえよう。

その例は次のようである。

日本という環境的影響と母の影響によって、遠藤の神の姿は、「誕生と死」「愛と苦痛」の象徴としての女神(チャームンダ)を通じて再誕生した。遠藤はチャームンダを通じてキリスト教の父なる神の姿ではなく、「母と同じような愛」を持つ神の姿を心から望んでいる。

また「ガンジス河」は、転生と救いの象徴的な存在である。遠藤のキリスト教はガンジス河を通して、東洋的な思考と提携し、自然と一団になりながら、生と消滅の輪廻に通じる永遠のエネルギーとしての役目を担つ。

遠藤の小説の中では、「神に目を向ける人間の世界と人間を眺める神の世界」が重要な位置を占めている。そのような見方の根底には、有限な人間が無限な永遠を求める祈願が在する。このような側面で、遠藤の文学とキリスト教は不可分のものである。

遠藤文学においてその核心は人間というカテゴリーから出発する。これは遠藤自身の文学的な信念として、作家精神の特有の地平を拡げていると考えられる。

遠藤は西洋のキリスト教に違背した神の姿を描きながら、「カトリック的良心と

36) Herbert Read, Collected Essay in Literary Criticism, Faber and Faber, 1950

作家的良心との二律背反にたえず、引き裂かれている」³⁷⁾苦悩を持つ。文学の構造的な面で遠藤は、イエスの愛を求める弱者としての人間と東・西洋の宗教観の対立を描くことに熱中してきた。

そのように遠藤が追い求めてきたものは前作、『白い人』『海と毒薬』『沈黙』などでも表されている。

『白い人』は第2次世界大戦中のフランスを舞台とし、神を信じない人とカトリック神学生との対立を描く作品である。遠藤は、悪魔的な性格の主人公と律法注意者的な神学生の対立を軸とし、人間に対する深い通察によって神についての観念と罪意識を表している。

このように対照的な人物の葛藤をよどみなく描いていることについて、首藤基澄は「『白い人』は知的に処理されたキリスト教へのアプローチ」であると見て、「弱者における魂の救いの問題は、以後遠藤文学のライトモチーフとなる」³⁸⁾と述べている。

『白い人』とならんで、遠藤文学の初期作品『海と毒薬』では、積極的に悪に参加する人間形、いかなる仕事にも呵責を感じることができない無感覚の人間形、そして生命と医師という職業に恐ろしさを感じ生体解剖実験の現場にいながらも何もすることができない人間形が登場する。

作品の中で遠藤は非人間的な行為を犯す人間と、それを批判しながらも拒否することができずに同参する人間の懦弱さを暴露する。本当に人間に必要なものは社会の制度や他人の耳目ではなく、自分の良心の声だということを明らかにしている。その良心の声と罪意識の背景にはキリスト教が位置している。

遠藤祐は、遠藤が「『海と毒薬』ですでにカトリック作家として、神なき風土における日本人の存在様態を凝視しながら、その背後にひそかに「だれかの

37) 注23)の前掲書 30頁。

38) 首藤基澄「遠藤周作の小説の構図」『国文学 解釈と鑑賞』6月号(至文堂、1975)90~96頁。

声」を、イエス・キリストのそれを提示していた」³⁹⁾と語っている。

結局、この小説は日本人にとっては神とは何か、罪と悪というのは何かという根本的な質問を投げかけた作品であるといえる。

続く『沈黙』においても、遠藤は「東洋と西洋」「日本とキリスト教」「強者と弱者」を対比させている。17世紀、日本のキリスト教の迫害という歴史的な事実をもとにする作品である。多くの人々に信頼を得ていた神父の背教、その事実を確認するために、日本に潜入した神父が経験する苦難と葛藤を描いている。そしてキリスト教徒という理由だけで無惨に死んで行く人々の苦痛にそっぽを向いたまま沈黙していらっしゃる神を語る。

作品の結末に、主人公のロドリゴ神父は背教を拒否して殉教の意志を持っていたため、自分のせいで拷問を受けて死んで行く多くの日本人信徒たちの姿を見るように強要される。このような状況のなかで、ロドリゴは深刻な価値観の混乱を経験する。結局これらの苦痛を止めようという意図として、背教を宣言して聖画を踏む。その時、ロドリゴはキリストの声を聞く。

「踏むがいい。おまえの足の痛みは私が一番よく知っている。私はお前たちに踏まれるためにこの世に生まれ十字架を背負ったのだ。(240頁)」

神学的に難解な問題、「苦難の瞬間に神はどこにいらっしゃるか」という問題を、絶体絶命の状況の中で悩む人物たちの内面描写を通じて描いている。

上述したように、遠藤は前作でも、人間の弱さを象徴する人物たちに遠藤自身を投影させながら、弱い人間の苦悩・苦痛に共感する。また弱者とともに苦

39) 遠藤祐「遠藤周作の軽小説」『国文学 解釈と鑑賞』6月号(至文堂、1975)114頁。

悩める神も描く。作品の中で遠藤は主人公の救いを望んでいるのである。

兼子盾夫はこれについて、「弱さを正当化するのではなく、ともに苦しむイエスこそ日本人のイエス像である」⁴⁰⁾と説く。

「私にとって距離感のあるキリスト教を、どうしたら身近なものにできるかということであり、いいかえれば、それは母親が私に着せてくれた洋服を、もう一度、私の手によって仕立てなおし、日本人である私の体にあった和服に変える、というテーマであった」⁴¹⁾という遠藤の言葉で、一連の作品等が持つ意味が分かる。

遠藤は作品の中で、信仰についての東洋と西洋の見方の差を照明しながら自分のイエス像を主人公たちに重ねて表現してきた。これは自分に合う和服に変えようとした試みであった。このような意図は『深い河』でも見られる。前作では個別的に表現された試みが『深い河』では総体的に現れる。遠藤は『深い河』を通して自分のすべての理想を表出しながら、日本・アジア・キリスト教がたがいに理解しあえる道を摸索したといえよう。

40) 兼子盾夫「遠藤周作における神の問題『沈黙』と『深い河』」『湘南工科大学紀要』3月号 第30巻第1号(湘南工科大学、1996) 108頁。

41) 遠藤周作「異邦人の苦悩」『遠藤周作文学全集』13(新潮社、2000) 173頁。

2. 新しい道

「深い河、神よ、わたしは河を渡って、集いの地に行きたい。

(8頁)」

これは作品『深い河』の冒頭に引用された黒人霊歌である。

引用された黒人霊歌の最後の部分に表現されているのは、「河」を渡って向こう側にたどりつき、聖者たちの集いへ流れ込みたいという神への祈りである。約束の大地に連れていってもらいたいという望みがそこに表現されているといえよう。

これについては、『「深い河」創作日記』1992年11月9日（月）の日記に、「「河」という題が「深い河」という題に変わったのは黒人霊歌の「深い河」を昨日聞いて、それこそこの小説の題をあらわしていると思った。作品中にこの霊歌を暗示する一節を入れたい」⁴²⁾と記したことで、遠藤が小説の題を取って付けたことが分かる。

小説『深い河』は全体は十三章から成り立っている。

十三章の中には「磯辺の場合」「美津子の場合」「沼田の場合」「木口の場合」そして「大津の場合」の五つの「場合」が含まれている。主人公たちはそれぞれの課題を持って登場する。

しかし、作品の舞台はヨーロッパでも日本でもなく、キリスト教の発生地「聖なる地」のエルサレムからも遠いところ、インドのガンジスである。これは遠藤が自分の宗教観を生かしやすい代替地としてインドのガンジス河を選んだと考えられる。『深い河』に登場する、それぞれの心の課題を持つ人物たちはガンジス河への旅行によって出会う。

42) 注5)の前掲書 129頁。

『深い河』は一章の愛妻をなくした男、「磯辺の場合」から始まる。癌で日々衰えていく妻を見守る磯辺に、死の影が迫ってくる。ボランティアとして患者の世話をする成瀬美津子とともに看病した妻は、自分は必ずこの世界の何処かに生まれかわるから私を探して見つけてくれ、と言い遺して死ぬ。妻が死ぬ時に残した「必ず。。。 」という妻との約束に促され、妻の転生への探索が、やがてインドへと磯辺を導く。

美津子は大学生であった頃、男子学生の大津をいじめたい衝動にかられて神を棄てろと誘惑し、彼の信仰を揺すぶり、傷つけてから棄て去った過去がある。しかしその記憶は、美津子が別の男と結婚した後も消え去らなかった。結局、離婚した後、彼女は大津に会おうとツアーに参加する。

遠藤が加賀乙彦との対談で『深い河』の構想について述べたところによると、遠藤は『スキャンダル』の次の純文学書下し小説としてこの『深い河』を書いたが、はじめは『スキャンダル』に出てくる成瀬美津子という女性を主人公にして、ずっと彼女に悪の問題を真正面から取り組ませるつもりであった。⁴³⁾

しかし、その構想を途中でやめ、それにかわって登場人物を何人か増やし、主人公を成瀬美津子から大津という挫折した男を主人公に転移させたのである。その理由は、成瀬美津子を主人公にすることによって悪の問題についての謎をこの小説では消化し切れなかったからである。それで、複数の主人公全員に共通する主題として「失われた愛を求めて」の彷徨というツアーの形態を取らせることになった。これは遠藤が「悪」という一つの主題よりは、作者内面の様々な主題を一つの作品の中で総合的に表現しようとしたためではないかと考えられる。

続く沼田は、幼い頃を満州の大連で過ごし、両親の離婚のため母親とともに

43) 注20)の前掲書 7頁。

日本に帰る。その時、沼田は可愛がっていた犬を置き去りにすることによって初めて別離の意味を知るようになった。後に動物と人間が交流する話を書く童話作家となった彼は、結核で危険な手術をした時、一羽の九官鳥の死が自分の身代わりになったと信じる。そこで、沼田はインドで一羽の九官鳥を求め、それを鳥獣保護区で放つ。

次の木口は、大戦中のビルマ戦線で戦った兵士である。退却中、彼は行き倒れになったが、一人の戦友が踏み止まり、彼を救けた。しかし彼を救ってくれた戦友が、当時、生き残るため人肉を食べたことによって苦しみ続けていた事実に向き合わされる。戦友はそれが心の傷になって、吐血して死んだ。その苦しみを慰めるために木口は、戦友を含む兵士たちのための法要を営みにインドへ旅立つのである。

最後に、遠藤と同じように本人の意志によって洗礼を受けたのではない「大津の場合」である。リヨンの修道会に入ったが、神父への道を歩もうとしながらも「日本人の心に合うキリスト教を考えたい (107頁)」という大津の日本人としての望みは、修道会から汎神論的であると批判される。

大津は「善と悪」を極めて厳しく区別するヨーロッパのキリスト教について抵抗を覚えて疑いを抱く。彼は修道会から異端の傾向を指弾されつづけ、最後にはインドに流れ着いた。大津はインドでヒンズー教徒の死体をガンジス河のほとりの火葬場に運ぶ仕事に従事する。彼の内部では、ヨーロッパとアジアの間に、神に近づく人間の姿勢が揺れ動いている。

大津は作者自身の宗教観の申し子として描かれている。つまり、大津が「異端」であるように、作者のキリスト教観もカトリック立場から見れば「異端」である。神父の道を歩もうとする神学生の「異端」という烙印は、作者の意図と密接な関係があるといえよう。

そしてキリスト教徒の遠藤周作が、小説の中で自身の宗教観を人間の苦悩とかかわらせる舞台としてエルサレムでなく、ヒンズー教の聖地のガンジス河を選び、それぞれ苦悩を持つ人々をその地に連れ出した事実は興味深いといえよう。

アジアの象徴ともいえるガンジス河のほとりで、信仰の内に生きる大津と、無信仰の立場から聖なる流れに歩み寄る他の人物たちが、心の奥では近々と寄り添って道を歩くのが見える。

作家は小説の素材を自分自身の信仰から取りながらも、主題は人間問題に焦点を合わせているといえよう。表面的にはどちらが正しいのか、正しくないのかを明確に表示しようとしなない。

『深い河』の「転生」および「救い」「神と愛の探求」というカテゴリーは、遠藤の文学の有力な流れとして、『深い河』の登場人物を通してそれぞれのテーマに表出している。そしてその代表的な象徴としてのガンジス河を「すべての人のための深い河(317頁)」と見る。作中人物全員が象徴するものとして、聖なる救いの河は、不変的な、人類の救済の河として「愛の象徴」になっている。

『深い河』の形式的構造を見れば、この小説の構造は人物たちの「並立と対立の葛藤構造」によって形成され、それがプロットの進行と融合して完成されていくことが分かる。それぞれの表情を持つ河は、インドを訪ねる旅行へと合流し、最後に実際のガンジス河へと流れ込む。お互いに対立して小説の発端から結末に至るまで平行線を維持しているが、結局、流れは合流しついに大きな深い河を作り上げる。

次章では、上述のような人物造型を遠藤の思想及び文学意識と関連づけて、『深い河』の主題と文学的意義について考えてみたい。

IV. 『深い河』の中のカトリック

1. 汎神論と汎在神論

遠藤は1993年の座談会で「汎神論」と「汎在神論」について、すべてのものに神が内在（すなわち神と全宇宙を同一視）するという「汎神論」に対して、自然というものを神の投影（すなわち神に全宇宙が内在）として感じるという「汎在神論」は、東方宗教と東欧のキリスト教に古くから見られる特徴的な自然観であると言及している。⁴⁴⁾

遠藤はこのうち、「汎在神論」が日本人に受け入れやすい観念であると考え、日本人としてそのような思考を持つのは当然であるとする。このような汎在神論的な認識は『深い河』だけではなく、他の小説の中にも同じく適用されている原理である。

遠藤の小説世界の大きな柱を成す「自然に対する関心、他の宗教に対する関心」は、彼の環境的、伝統的な思想においては十分に説明することができない。東洋の伝統的な信仰観では、神と人間が自然を母体にして出発するから、「人間と神と自然」は互いにつながっている。遠藤が考えてきたキリスト教も、自然と人間が未分化の状態、自然の一部として現れている。

しかし、西洋は「神と人間」の対立に土台を置いていて、東洋とは確実に対比されるというのが遠藤の主張の核心であるといえよう。このような西洋のキリスト教と矛盾する遠藤の伝統的な情緒は、彼の小説世界を構築する思想的な柱になっている。

44) 井上洋治・安岡章太郎・遠藤周作「座談会「信」と「形」－『深い河』を手がかりに」『群像』（講談社、1993）198～219頁。

これについて、三木サニアは「全ての人の中へ抱擁され、溶解されることを祈念しつつ、死場所として選ぶ母なる大河ガンガーも又、「神」そのものではなく、「神の投影」として汎在神論的に描かれているといえるのではなかろうか。」⁴⁵⁾と述べている。

また、武田秀美は、「(『深い河』で：引用者)カトリック作家として、諸宗教が究極の目標とする救いや癒しという共通のはたらきに基づいて「多元的宗教観」というテーマを表出している。」⁴⁶⁾と説いている。

武田秀美によると、このような「多元的宗教観」は、世界宗教のそれぞれの枠を超えて、人間存在という根源的・普遍的な立場からすべての人間にとって魂の救いという共通のテーマを扱っている点で、「宗教多元主義」とは明確な相違がある。「多元的宗教観」に比べて「宗教多元主義」は、「キリスト教の立場から見た他宗教との関係に対する考え方であり、キリスト教以外の他宗教も、救いを求めるという同一性において、対等に認めようとする神学上の立場」⁴⁷⁾であると説明する。

しかし、作品の中に見られる上のような宗教的な傾向は、哲学的理論よりは、東洋という特殊な環境的な背景からの影響によると考えられる。

遠藤の宗教的特性も地域的・環境(家庭)的背景によって選択されたと言える。

「宗教性を持っている人間が何かの宗教を選ぶときには、たとえば、たまたまインド人に生まれていると、自分の心の奥にある考え方、感じ方を

45) 注3)の前掲書 104~114頁。

46) 武田秀美「遠藤周作『深い河』－「多元的宗教観」のテーマをめぐって－
(キリスト教文学研究、1999) 88~100頁。

47) 注46)の前掲書 88~100頁。

満たしてくれるものはヒンドゥー教であると考え。というのは、周りにはヒンドゥー教しかないから。あるいは、イランやイラクになると、イスラム教だと。そういう差別、区別、その人の生まれ育った環境、民族、言語によってほとんど選択されると思う。」⁴⁸⁾

遠藤は日本人の立場で、作品をもって西欧キリスト教と思想的に融和させて行く。遠藤は他宗教に向けて寛容を施しながら、すべての人類は宗教に構わず救われると見ている。これは遠藤の日記を通して分かる。

「おれは基督教の神もヒンズーの神も半分信じる気持になった。大事なのは宗教の形ではなく、イエスの愛を他の人間のなかで発見した時だ。イエスはヒンズーのなかにも仏教信者のなかにも無神論のなかにもいる」⁴⁹⁾

遠藤に見える上のような特徴は、東アジアの地域的な特性による日本的な思考(観念)であるといえよう。このような思考は作品の中で、主人公たちを通じて具体化される。

「ぼくはヨーロッパの基督教を信じているんじゃない、ぼくは…
(105頁)」

「彼等が手でこね、彼等の心に合うように作った考え方が…東洋人のぼくには重いんです。溶け込めないんです。それで…毎日、困って

48) 注5)の前掲書 144頁。

49) 注5)の前掲書 62頁。

います。仏蘭西人の上級生や先生たちにうち明けると、真理にはヨーロッパも東洋もないって戒められました。すべてはお前のノイローゼかコンプレックスだろうって。玉ねぎについての考え方も… (106頁) 」

「でも、ぼくの考えは教会では異端的なんです。お前は何事も区別しない。はっきりと識別しない。神はそんなものじゃない。玉ねぎはそんなものじゃないって。」

「じゃ、棄てちゃえばいいじゃないの、そんなややこしいもの。」

「そう簡単にいかないんです。(107頁)」

「それではお前にとって神とは何なのだ。」

と修道院で三人の先輩に問われて、ぼくはうっかり答えたことがあります。

「神とはあなたたちのように人間の外にあって、仰ぎみるものではないと思います。それは人間のなかであって、しかも人間の包み、樹を包み、草花をも包む、あの大きな命です。」

「それは汎神論的な考えかたじゃないか。」

でも東洋人のぼくには彼等のように何ごともしっかり区別したり分別したりできないのです。

「神は人間の善き行為だけではなく、我々の罪さえ救いのために活かされます。(191頁)」

『深い河』の中で遠藤は、主人公の大津を通してそれぞれの宗教の有無に関わらず、すべての人間が共通的に求める救いを語っている。これは西洋の

キリスト教会から汎神論的な思考と批判される。このような思考はキリスト教会では危険な異端という意味を持つのである。

「神は色々な顔を持っておられる。ヨーロッパの教会やチャペルだけでなく、ユダヤ教徒にも仏教の信徒のなかにもヒンズー教の信者にも神はおられると思います。(196頁)」

大津が上のように発言した時、神学校の指導司祭は「その考えこそ、君の汎神論的な過ちだ(197頁)」と烈しく叱られる。

また、校長先生が「君はなぜ仏教徒に戻らない。そのほうが君の考えに自然な復帰ではないのか(198頁)」と問いつめられて、大津は「いいえ、私が育ったのは…日本でも仏教徒の家ではなく、先生たちと同じように基督教の家庭でした。だからぼくが神の多くの顔のなかでも先生たちと同じものを選ぶのがぼくには自然だったのです。(198頁)」と答える。「では君は改宗をどう思うかね。たとえば、仏教徒が仏教を棄てて基督教になるとか。(198頁)」と問われて、「それはありうると思います。それぞれが自分に相応しい異性を結婚の相手を選ぶのと同じでして(198頁)」と言う。

「悪と善」は不可分として絶対に相容れぬと見る修道会から、大津は異端的な傾向があるといわれて、結局、神父になる資格をとり上げられる。

遠藤は『私にとって神とは』において、「日本人がキリストと名づけるのがいやなら「ダマネギ」という名前にしても「X」という記号にしてもいいと思います。しかしXというものが、私の場合はキリストという形をとってあらわれました。ほかの人には仏という形をとってあらわれるかもしれません。」⁵⁰⁾と述べている。

50) 注12)の前掲書 33頁。

『深い河』の中でも、このような見方は現れている。神父たちが使う神という言葉に縁遠かった美津子に、大津はダマネギを他の名にかえてくれる。神の存在を信じない美津子に、大津は神の存在を次のように説明する。

「神は存在というより、働きです。玉ねぎは愛の働く塊りなんです。」

「なお気持わるいわ、真面目な顔をして愛なんて恥かしい言葉を使われると。働きって何よ。」

「だって玉ねぎはある場所で棄てられたぼくをいつの間にか別の場所で生かしてくれました。」

「そんなこと」と美津子はせせら笑った。「別に玉ねぎの力じゃないわ。あなたの気持が自分をそう仕向けたんじゃないの。」

「いいえ、ちがいます。あれはぼくの意志など越えて玉ねぎが働いてくれたんです。(104頁)」

遠藤は、自分が神の存在を感じるの、今日まで背中を何かを押してくれてきたと感じたからであると言う。遠藤にとって神の存在は、対象として見るのではなく、その働きによって感じるのである。

「たとえばもしあなたが、私がいままで話してきたことを聞いて、キリスト教に興味を持ち、やがて洗礼を受けたとすると、神は直接目に見えるわけではないけれども、私という者を通してあなたに働きかけたことになる。神はいつも、だれか人を通してか何かを通して働くわけです。私たちは神を対象として考えがちだが、神というものは対象ではありません。その人の中で、その人の人生を通して働くものだ、と言ったほうがいい

かもしれません。あるいはその人の背中を後ろから押してくれていると考えたほうがいいのかもかもしれません。私は目に見えぬものに背中に手を当てられて、こっちに行くようにと押されているなという感じを持つ時があります。」⁵¹⁾

「神とは自分の中にある働きだ、と私は考えているのです。その働きをキリストと言ったり、仏と言ったりするんじゃないだろうか、私は思っているわけです。くりかえして言うと、神の存在ではなくて、神の働きのほうが大切だということなのです。では神が私に対してどう働いてくれたかといったら、それは私の場合、母親というものを通して、あるいはそのほか私の人生において非常に関係の深い人々を通してという形で働いてくれました。」⁵²⁾

すなわち、神は存在ではなくて、働きなのである。このような考え方は汎在神論の代表的な例であるといえよう。遠藤は自分がキリスト教徒になったのは、神を信じる場が設定されていて、その中で自然にキリスト教徒になったという。遠藤はそれが神の働きのためであると見る。遠藤のこのような見方は、自分の投影的な存在である大津の例を見ても、神とは「どのように呼ばれても構わない存在」という確信に満ちていることが分かる。

西洋キリスト教の厳格に対する代案として示された遠藤の日本的な宗教観には全面的に同意しにくい。しかし、その二つの世界観が衝突するしかなかった彼の意識の場は、彼の手先でいちばん鮮やかに蘇ったのが事実である。

文学とは、その中で多様な人間の具体的な運命を描く。遠藤が自分の中

51) 注12)の前掲書 20~21頁。

52) 注12)の前掲書 26頁。

で、作中人物を通じて新しい神の姿を求めるという事実は、文学の自律性を損われないと思う。

『深い河』の中でも自然を眺める遠藤の視泉は、絶対的に日本的な立場を取る。日本人の目に映る自然と西洋人の目に映る自然とが違うのは、西洋人の自然観では自然を人間と対等の立場にして改造しながら開拓したからである。西洋人はかつて実験と理論をもって自然を探求し、東洋より進んだ物質文化を成した。一方、東洋人は自然を開拓・征腹の対象として見るのではなく、自然の摂理に従おうとした。東洋人は古くから受動的に自然の摂理に順従してきたのである。遠藤の自然は、このような東洋の情緒を土台とするといえよう。遠藤が『深い河』の中で求めようとしたのは、自然物に通じる「生と死の循環構造」と、自然と人間を並立させながら「自然と人間の救い」であることが分かる。

2. 死の再解釈

『深い河』の分析において肝心な手掛りとなる概念がある。それは「復活」という概念である。遠藤は『深い河』の中で、死についての新しい解釈を提示する。既存のキリスト教での「復活」とは、イエスにだけ該当するが、遠藤はこの作品の中でこの「復活」を「転生」と同一化して一般人にまで適用させている。

遠藤は『深い河』で、「復活」という表現を「転生」に換えて用いている。キリスト教徒の作家が「復活」を「転生」に換えて表現した意図は何だろうか。

本章では作品の登場人物を通じて遠藤が表出しようとした「復活→転生」という問題を遠藤の信仰観と関連づけて考えてみたい。

『深い河』は愛妻をなくした男、「磯辺の場合」から始まる。

磯辺は 癌で日々衰えていく妻を見守っているが、ついに妻に死の影が迫ってくる。

「あの樹が言ったの。命は決して消えないって(12頁)」

「わたくし。。。必ず。。。生れかわるから、この世界の何処かに。

探して。。。私をみつけて。。。約束よ、約束よ。(26頁)」

ボランティアとして患者の世話をする成瀬美津子とともに磯辺は妻を看病してきたが、妻は、自分は必ずこの世界の何処かに生まれかわるから私を探して見つけてくれ、と言いついで死んで死ぬ。

磯辺は妻の葬儀の日、住職から転生についての次のような話を聞く。

「仏教では人間が死にますとその魂魄が中有という状態になると考えております。中有というのはまだ転生しておらん状態ではな、ふわふわと人間界をさまよっている。そして七日毎に、一組の男女の体内にもぐりこんで新しい命となって生まれ変わる。(28頁)」

この瞬間、磯辺は妻の「必ず…生まれ変わるから(26頁)」という言葉がよみがえる。

「必ず…生まれかわるから、この世界の何処かに」
探して…わたくしを見つけて、という妻の最後の謔言はなまなましい残像のように耳の奥に残っている。
だが磯辺はそんな不可能なことがあるとは思えなかった。ほとんど多くの日本人と同じように無宗教の彼には、死とはすべてが消滅することだった。
(33頁)

「死とはすべてが消滅する(34頁)」のであると考えた磯辺に妻の死は、単に妻の死にとどまらない。妻が生前に使っていた日常用品等も以前と同じように家の中に存在しているから、磯辺は妻の死を実感することができない。

「お前が活着ている間は、死はおれのずっと向うにあるようだった。だがお前が両手を拡げて遮ってくれた死は、お前がいなくなる急に眼前に現れたようだ。(33頁)」

「自分には生活のために交わった他人は多かったが、人生のなかで本当にふれあった人間はたった二人、母親と妻しかいなかった。(308頁)」

磯辺は妻の「生まれ変わり」を求めるためにインド・ツアーに参加する。ここで「生まれ変わる」とは生命と死についての日本的な考え方で、「転生」を指している。

磯辺は輪廻転生を信じはしなかったにもかかわらず、「生まれ変わる」という妻の言葉に応えるために、日本に関する「前世」の記憶を持つ子供についての話を聞いて、その小女を探しにインドへ旅立つ。もしかすると、そこに妻の転生があるかもしれないからである。

しかし、ついに転生する妻を見つけられなかった磯辺に美津子はガンジス河のほとりで次のように言う。

「少なくとも奥さまは磯辺さんのなかに」と美津子はいたわった。「確かに転生していらっやいます。(349頁)」

磯辺が妻を失ったのではなく、彼の心奥の中に思い出という形で生き残っているというのである。これについて、三木サニアは「磯辺の妻は、現実世界の中の、目に見える姿としてではなく、それぞれの心の中に生きて働く霊的存在として、磯辺の深い愛の思いの中にいきいきと蘇っているのである。そして、この現象こそを遠藤は＜転生＞であり＜復活＞であると示唆しているのではなかろうか。」⁵³⁾と記している。

53) 注3)の前掲書 104~114頁。

遠藤は『私にとって神とは』に復活の意味について次のように述べている。

「イエスの死後、使徒たちの心の中で、イエスはキリスト（救い主）という形で生き始めました。イエスの本質的なものがキリストで、その本質的なものが生き始めたということです。現実のイエスよりも真実のイエスとして生き始めたこと、これが復活の第一の意味です。…（中略）… 今日まで私は自分の母やある人々によってキリスト教に結び付いたのは、イエスが母やそれらの人々の人生をつうじて私をつなぎとめたから、という感じがあり、イエスは、やはりそれらの人々のなかで生きている、復活している、とってきたからです。私の復活の考え方はこれです。」⁵⁴⁾

遠藤にとって復活とは、西洋とは違う形として形象化された。遠藤は死が消滅ではなく、人々の記憶の中にあるいは心の奥に生き残るのであるという。遠藤はこのような考え方を作品の中で繰り返して言っている。

『深い河』に現われた「河」の象徴的な意味の一つは復活(死→復活)のイメージである。遠藤は河を通じて、死と再生の世界をともに表している。河はイメージ自体が流動的なので、水の属性としてそのイメージを規定しにくい。すべての生命が水から始まるということで、水は新しい創造の母胎にもなる。悲劇的意味としての水のイメージは死滅の意味を持つが、再生の意味として生命的なイメージもある。そのイメージを通して見た場合、死は単純に死自体として終わるのではない。

河の属性による「再生」または「転生」を、誰かの心における転生（復

54) 注12)の前掲書

活) に結び付けており、これは作品の題が与えるイメージとも繋がっている。

3. 同伴者としての姿

遠藤の考えるキリストのイメージは次のようなところに表されている。

「私にはイエスが無能力者であって、奇跡なんか行えなかった人で、そのかわり、みんなと一緒に苦しもうとした人であるというイメージがあるんです。イエスはこの地上ではすべてのことで失敗する、そう思っている。」⁵⁵⁾

その中には人間の苦しみを理解しているイエスが見える。このようなイメージは『深い河』にも溶解されており、沼田・木口・大津の場合において確認することができる。

まず、童話作家の沼田の場合である。幼いころ大連で過した沼田は、両親の離婚のため可愛がっていた犬を置き去りにして日本に帰る。このような記憶が契機となって、沼田は人間と動物とが交流する物語を書く童話作家になった。若いころ結核で手術を受ける際にも、一羽の九官鳥が「まるで身代わりのように死んでくれた(330頁)」と信じて、自分の身代わりに死んでくれた九官鳥についての「お返し(290頁)」として、彼は九官鳥を放つためにインドのツアーに参加する。沼田にとって、犬、犀鳥、九官鳥のような動物は唯一の「本心で語る(130頁)」人生の同伴者というイメージとして認識されている。これら犬や鳥やその他の生きものは、沼田の童話の中に、人間を支えてくれた存在として転生して生き続けることになる。

次の木口は、戦争で自分を救ってくれた戦友の塚田が、戦争中、生き残る

55) 三好行雄・遠藤周作 「<対談>文学-弱者の論理」国文学 2月号(學燈社、1973) 24頁。

ために同僚兵士の人肉を食べたことによって一生を苦しみ続けてきたことに気づく。人肉を食べなければ生きられなかった塚田と戦争で死んだ兵士たちのために法要を営みにツアーに参加する。

作品の中では、塚田が死ぬ前、病床の塚田を慰めながら彼の苦悩を癒してくれるガストンという外国人青年が登場する。

「眼鏡をかけた背の低い外人青年が、老患者の車椅子をおしてエレベーターに向かっているのとは違った。青年は下手糞な日本語で老人を笑わせていたが、その顔は馬のように長く、木口が若い頃、無声映画でみた喜劇俳優の—そう、あれはフェルナンデルとかいった役者によく似ていた。(149頁)」

ガストンは滑稽に見えるが、病気に苦しむ病院の人々を慰労する人物である。塚田はガストンに慰められ理解されて、死を迎える。このガストンも、やはり沼田の動物と同じく同伴者としての存在であるといえる。

続く大津の場合も同じようである。インドの人々が死を迎えるために行くガンジス河。その人々が死んだ時、その死体は聖なる河のガンジス河で焼かれ、灰となって河に流される。その「聖なる河」の町に、美津子にも、ヨーロッパのキリスト教からも見捨てられた神父の大津が住んでいる。そこで彼は、行き倒れを背中に背負って火焼場に運ぶ仕事に従事する。

作品の中で大津は、遠藤の信仰観を託された存在で、彼が考えてきたキリストの姿をそなえている。ガンジス河のほとりでの大津の行為は、その意味においてイエスの真似である。大津の生活とともに彼の中には、転生したイエスがある。

「（あなたは）と大津は祈った。（背に十字架を負い死の丘をのぼった。その真似を今、やっています）火葬場のあるマニカルニカ・ガートでは既にひとすじの煙がたちのぼっている。（あなたは、背に人々の哀しみを背負い、死の丘までのぼった。その真似を今やっています。（314頁）」

大津はインドという場所で、最下層の人々の中で、イエスの真似をやっていることである。大津はフランスへ神父になるために渡った時、キリスト教と自分の考えてきた宗教の間に、決定的な差異を自覚する。リヨンの神学校に入り神父としての道を歩もうとする大津の「日本人の心に合う基督教を考えたい（107頁）」とする望みは汎神論的であると批判されるのである。

遠藤と同じく、自らの意志で受洗したのではない大津は、リヨンの修道会の「善と悪を峻別する考え方」に抵抗を感じ、ヨーロッパのキリスト教に疑いを抱く。そして彼はヨーロッパのキリスト教から「異端」と呼ばれる。

神父として不適格という烙印を押され続けた大津は、ついにガンジス河の町でインドの賤民とヒンズー教徒の死体を火葬場に運ぶ仕事に従事するようになる。

「あなたはヒンズー教のバラモンじゃないのに…」

「そんな違いは重要でしょうか。もし、あの方が今、この町におられたら」

「あの方？ ああ玉ねぎの事？」

「そうでした。玉ねぎがこの町に寄られたら、彼こそ行き倒れを背中に

背負って火葬場に行かれたと思うんです。ちょうど生きている時、彼が十字架を背にのせて運んだように」 (中略)

「…でも結局は、玉ねぎがヨーロッパのキリスト教だけでなくヒンズー教のなかにも、仏教の中にも、生きておられると思うからです。思っただけでなく、そのような生き方を選んだからです。」 (300頁)

ガンジス河での美津子と大津の会話の中にも、大津の宗教観が要約されていると見られる。大津はインドで再会した美津子に、ヒンズー教の火葬場で働く行為がイエスが行ったことと同じであると語る。

遠藤と同じように、大津にも神とは人間が単純に仰ぐ存在ではなく、苦痛・辛さ・苦悩をともしにする人生の同伴者としての存在である。遠藤は、ガンジス河で病者たちを運びながら彼らの苦痛をともしにする大津に自分の信仰観を託して語っている。

「さまざまな宗教があるが、それらはみな同一の地点に集まり通ずる様々な道である。同じ目的地に到達する限り、我々がそれぞれ異った道をたどろうとかまわないではないか。(310頁)」

上の引用文は大津が愛するマハートマ・ガンジーの言葉である。これを換言すれば、イエスはこの世の中に、どの宗教の中にも「愛の働き」として存在するということである。

兼子盾夫は「遠藤は同伴者イエスのなかに母性原理を見いだす」と見て、「遠藤には最初から人間存在の深い闇への洞察が見られることで、人間の持つ闇(罪、死への志向)の部分を見る」と述べている。そして、「これは遠

藤の病歴、彼の人生における死との距離とおそらく無縁ではないだろう」と見ながら、「遠藤が人間の業を直視する意味で宗教的であると言える」と記している。56)

従って、これら「ガストン・沼田の動物・大津」の存在が、遠藤が求めてきた同伴者としての神の姿を持つのは明らかであるといえよう。

56) 兼子盾夫「日本におけるキリスト教受容の問題」(比較思想研究、1996) 27~33頁。

4. 愛の母としての存在

小説の中に登場するヒンズー教の女神チャームダーは、人々が苦しめてきたすべての苦しさを象徴的に現わしている。遠藤がこの作品で話そうとした母は、世俗を遠く去る清楚な西欧的な聖母マリアのイメージではなく、インドの苦難をともにする格好悪い女神チャームダと見られる。この女神は西洋のマリアとは違い、醜く病んでいるイメージを持っている。

「彼女の乳房はもう老婆のように萎びています。でもその萎びた乳房から乳を出して、並んでいる子供たちに与えています。彼女の右足はハンセン氏病のため、ただれているのがわかりますか。腹部も飢えでへこみにへこみ、しかもそこには蠍が噛みついているでしょう。彼女はそんな病苦や痛みにも耐えながらも、萎びた乳房から人間に乳を与えているんです。（中略）彼女は…印度人の苦しみのすべてを表しているんです。長い間、印度人が味わわねばならなかった病苦や死や飢えがこの像に出ています。長い間、彼等が苦しめてきたすべての病気にこの女神はかかっています。コブラや蠍の毒にも耐えています。それなのに彼女は…喘ぎながら、萎びた乳房で乳を人間に与えている。これが印度です。この印度を皆さんにお見せしたかった。（225頁）」

これについて饗庭孝男は、遠藤が西洋の基督教の「聖母」に対応させるためにチャームダーの女神を描き出したという。従って、この女神は「母」なるものの理想としての「聖母」ではなく、現実の「愛」の姿であり、遠藤はそれを日本をふくめたアジア的な自然の中で愛を求めたといえる。⁵⁷⁾

遠藤はこのチャームンダーを通じて彼が追い求めてきた神の深い愛、すなわち母なる神の姿を描き出したといえよう。

遠藤の「母の宗教の象徴」としてのチャームンダは西欧の聖母とは距離があり、独特の東洋神学を形成するものである。これはイザヤ53のイエスの姿にも連想されている。

「彼は醜く、威厳もない。みじめで、みすぼらしい
人は彼を蔑み、見すてた
忌み嫌われる者のように、彼は手で顔を覆って人々に侮られる
まことに彼は我々の病を負い
我々の悲しみを担った。(71頁)」

遠藤は、キリストの姿を英雄的・男性的なイメージから女性的なイメージへと変えることによってキリストの姿を描く。遠藤が描いた神は、人間の貧しく惨めな生活を知っている。遠藤の神は、宿命的な人間の弱さも見ている。人間が求めている神は罰する神ではないということを遠藤は考えていた。

結局、遠藤が『深い河』で話している自分の神は、慈愛の母のような存在である。このような思想は『深い河』において窮められる。

遠藤にとって宗教とは二つに分かれる。「父なる宗教」と「母なる宗教」。遠藤は「父と母」について次のように定義する。

母とは少なくとも日本人にとって「許してくれる」存在である。子供のどんな裏切り、子供のどんな非行にたいしても結局は涙をながしながら許

57) 饗庭孝子「アジア的自然のなかの「愛」」7月号 第1062号(新潮、1993) 222~225頁。

してくれる存在である。そしてまた裏切った子供の裏切りよりも、その苦しみと一緒に苦しんでくれる存在である。

母にたいして父は怒り、裁き、罰する。それは正しく、秩序をもつが、非行の子供にとっては怯え、震える対象だ。58)

利沢行夫はこれを母の影響、すなわち「夫を疑い、かたくなに心を閉ざそうとする現実の母親をまえにしながら、真に母性的なもの、限りない愛情によってすべてを包み込んでしまおうとするようなものの存在を、他方で本能的に求めていたのではなかったろうか。」59)と見る。苦痛の中でも新しい生命を誕生させるという意味で、「母」は再生と包容のイメージを持つ「(母なる)河」とも一脈相通する。

遠藤は「断っておくが、キリスト教は（中略）父の宗教だけではない。キリスト教のなかにはまた母の宗教もふくまれているのである」60)と語っている。

これについて、遠丸立は「作者がイエス像のなかに彼の母親像をダブらせているという事情だ。彼にとってのイエスは、ある意味で彼自身の母親像でもあるのだ。その点が遠藤のイエス像の独自なところである。イエスは彼にとって母なるもの、女性的なるもの、の代名詞でもある」61)と述べている。

遠藤にとってチャームダーは、ガンジス河のように一人一人の人生を原初から包み込むような「母なるもの」を感じさせる存在である。

キリストの愛についても、遠藤は父性よりも愛の象徴としての母性を求める信仰観を持っていたことを窺わせるところである。

58) 遠藤周作「弱者の救い」『遠藤周作文学全集』13（新潮社、2000）104頁。

59) 利沢行夫「幼少年期の遠藤周作」『遠藤周作の文学世界』6月号（国文学、1975）16~22頁。

60) 遠藤周作「父の宗教・母の宗教」『遠藤周作文学全集』12（新潮社、2000）377頁。

61) 遠丸立「遠藤における罪と悪」『遠藤周作の文学世界』6月号（国文学、1975）86頁。

5. 永遠への道

「美津子の場合」における美津子は大学生であったころ、洗礼を受けたみすばらしい学生の大津を誘惑し、彼の信仰心を揺さぶり傷つけて捨てた過去を持っている。遠藤は美津子にキリスト教の悪の姿を投影していると考えられる。

美津子は「冷えのような空虚感（77頁）」を抱いて奔放な生活を送りながら、宗教に没入する大津に嫌悪感を抱いた。美津子は別の男と結婚し、フランスへの新婚旅行の時、夫と別行動をとってリヨンにいるという大津を訪ねたことがある。

「この時、ふしぎに心に甦ってきたのが、みすばらしい修道服で大きな編上靴を動かしながらベルクール広場を歩いていた大津の姿だった。こちらの気持ちに気づかず玉ねぎの話ばかりしている大津。ゴルフと新型の車しか話題がない夫と同じように退屈だが、大学時代の友人や矢野たちとはまったく対照的な男。（一体、何がほしいのだろう、わたしは…）彼女は新婚旅行の間、そればかり考えた。（110頁）」

このような大津についての記憶は執拗に美津子を把え、美津子は年を重ねていくうちにますます強く彼に惹かれていった。それは自分の中にはない生き方を大津が持っているからだ和美津子は考える。

『深い河』は主人公たちのそれぞれの事情に関する叙述に多くの分量を割いているが、大津に主動人物として重点が置かれている。遠藤は、自分の宗教観によって神を希求する大津を私たちの前に提示する。作中人物の中で、作者が自身の宗教観をもっとも鮮明な形で示したのは大津であろう。大津は美

津子の誘惑に届した心の傷を跳躍台として本格的にキリスト教の道に入って行く。彼も美津子も遠藤が描く弱者の典型であるといえよう。

大津の愛の行為が表される場はすべてをつつみながら流れているガンジス河である。遠藤はその主題の中心にインドのガンジス河を置いている。エルリアデはこのような水のイメージについて、相反する二つの解釈を打出した。水は根源または源泉としてすべての存在可能性の保存所であるのみならず、すべての形態に先行してすべての創造を支えると見た。そして、水は形態を分解して消滅させるという性質を持っているゆえ、水の特性は「殺すこと」にもあると強調した。⁶²⁾ 水は地球上に存在するすべての生命の源であると同時に、生命の終り、すなわち死を意味するものである。

この作品における河は単純な旅先ではなく、怒りと悔恨が調和して自分の過去が理解される場である。主人公たちはその場で初めて自分の過去と握手して、自ら積んできた業報を抱えこむ。

「ガンジス河を見るたび、ぼくは玉ねぎ考えます。ガンジス河は指の腐った手を差し出す物乞いの女も殺されたガンジー首相も同じように拒まずに一人一人の灰をのみこんで流れていきます。玉ねぎという愛の河はどんな見にくい人間もどんなによごれた人間もすべて拒まず受け入れて流れていきます。(302頁)」

ガンジス河は、人々が死を迎えるために巡礼してくる所である。人々は焼かれて灰になって流されるが、河は生まれ変わることを約束してくれる所である。また、罪がすべて流され、だれもが浄化され、生者も死者も優しく抱かれる所で

62) Eliade Mircea, images et symbols, Gallimard, 1986

もある。

日本人の道德観念で「ツミ」のイメージというのは、キリスト教の言う罪ではなく、穢れか、人生を生きる上での苦しみのことだと思います。キリスト教で言う罪というのは、簡単に言ってしまうと、自分が神になるか、あるいは神による救済を絶望することです。⁶³⁾

上記のように遠藤は、悪行を犯したにも関わらず、悪行にも救済の契機がひそんでいて、地獄にも救いのあることを信じさせてくれる何ものかを作品の中で痛切に希求する。

清浄と不潔、慈悲と残忍などが共存しているヒンズーの世界の象徴としてガンジス河を作者は「この河は人間のどんなことでも包み込み…」 「すべての人のための深い河 (317頁)」と見る。

遠藤にとって自然は、限界を自覚した人間がその限界を超えようとする時の彼岸としての対象、死を飛び越える存在である。「自然は宇宙の神の体内に、また人間の体内に存在しているから」⁶⁴⁾であるというフライの理論のように、遠藤は自然を通じて永遠回帰(救い)を求めたのではないかと思う。

遠藤は人間の生命の根源を見出したのである。死の不安と恐怖から脱するため、生命現象の循環に人間の生を透写して同一視した。このように自然と自分を同一視する方法で、遠藤は自然現象と人間との関係を凝視し、その生を通じて意味を探していたといえる。

死体の灰を流したそばでインド人たちは沐浴する。彼等はそれを不潔と思わないからである。ガンジス河はヒンズー教徒に聖なる、母なる河である。いつの日

63) 注1 2)の前掲書 141頁 再引用

64) Frye Northrop, *Anatomy of criticism*, Princeton University Press, 1973

かそこで流されるため、彼らは長い旅をつづけ、この街にやって来るのである。そこは人が死ぬために集まってくる所である。河は相変わらず黙々と流れており、変らぬ神の愛を意味する。

カッシーラーがいうように、人間というものは象徴的な動物であり、言語・神話・宗教・学問・芸術は、人間がそれらに実際の世界を投映し、その認識にたどりつく象徴的な形式といえるが、象徴というものはある内面状態の外面的表示だといえよう。⁶⁵⁾

文学の場合、単純に外部的な意味以外に内部的な意味をも内包しているゆえ、これは象徴であるといえる。もちろん、すべての小説が象徴的であるとはいえないが、遠藤の小説にこのような象徴的な手法が用いられていることは見逃すことができない。例えば、遠藤がガンジス河を神の概念として象徴化している点である。

日本人にとって、河のような自然は、神の意味を持つといえる。これが西洋人が神に帰依して、神に自分をささげようとすることも同様な心的状態である。自然は、日本人にとっては永遠な郷愁である。作品の中で、救いの祈りを捧げながら、深い河の奥に流れて行くことは、運命的な自然への没入であり帰依である。

遠藤はこの作品で、弱者を抱きしめ、人間であるゆえに犯さざるすえない罪を包容する愛と永遠の象徴としての「河」を題材としたのではないかと思う。

65) William York Tindall, *The Literary Symbol*, Indiana University Press, 1955 p.5.

V. 結 論

本稿では遠藤周作の小説『深い河』において、作家が持っている神についての深層的意味を考察した。その結果、遠藤の作品の中に見られる「神と人間」が、外部からの主題の志向性および作家個人の自意識と、密接に関わっていることを確認することができた。

本稿の一貫した観点は、遠藤の作品に示されたこのようなメッセージが作家個人の内面の積極的な告白であると同時に、それを形象化しようと努める創作的意図であるという認識である。このような観点に立って、作家の意識世界と作品の関係を分析し、宗教意識と関わる『深い河』の文学的な意味を考えてみた。

Ⅱ、Ⅲ章では、遠藤文学の原形となる「日本と西洋の距離感」について考察し、遠藤文学における思想的背景とカトリック作家としての信念とを探ってみた。

遠藤の文学精神は「人間は自然の産物」であるという認識から発している。また、幼いころの入信体験と留学体験が、遠藤の作家生活に重要なモチーフとなっていた。カトリック信者の母親の影響でカトリック教会に通うようになった遠藤は、自発的な入信ではないので自分の信仰の異質性について考えるようになった。そして、フランスの留學生活で西洋宗教であるキリスト教についての距離感を自覚した。このような体験は遠藤の作家生活の全般に一貫して関わっており、特に『深い河』に色濃く反映されている。

遠藤がキリスト教の家庭で教育を受けたことは、彼にとって肝心の文学的な土壌となった。「日本人の心に合うキリスト教の神の形象化」というカトリック作家としての作業は遠藤に文学者としてのアイデンティティーを持たせたのである。

Ⅳ章では、遠藤の内面世界に定着するようになった自然意識の小説的な受容及び神についての認識の問題などを考察した。『深い河』の中で、自然・

死を眺める遠藤の視線は日本的な立場を取るが、これは汎在神論的な立場である。作品は日本の情緒を土台にして人間の永遠(救い)を描いている。

無限な宇宙の中で永遠を志向する遠藤の文学的信念の根底には、避けることのできぬ死に対する恐怖があった。彼はその恐怖を、河に通じる自然回帰によって超極しようとしたのではないかと思う。遠藤のこのような存在論的な希求が、作品活動を通じて永遠を追い求める念願とともに定着したのであろう。

遠藤は神に対する存在の認識についても「キリストの姿」を日本的な見方で眺めながら、すべての不安を超越し救いを得たいという意志を示している。

なお、遠藤は死と復活について、日本人の立場から「転生」という概念を用いて新しい解釈を試みた。遠藤は、キリストの姿についても西洋の認識とは異なる立場を取っている。既存のキリスト教における「復活」はイエスにだけ該当するが、遠藤は『深い河』の中で、「復活」という概念を一般人にまで適用させる。

作品に見られる「河」の象徴的意味は復活(死→復活)のイメージとして、河を通じて、死と同時に再生の世界を一緒に見せている。河のイメージを通して見た場合、死が消滅ではなく、人々の記憶の中に生き残るのであるということを作品の中で繰り返して示している。

また、『深い河』の中で遠藤は、キリスト(神)の姿に登場人物(大津・動物・ガストン)を通して、仰ぐ存在ではなく人生の苦痛をともにする同伴者としての姿をも追い求めた。遠藤が抱いていたキリスト像は、人間の苦しみを理解しているイエスである。このような遠藤の神は、人間のような宿命的な弱さをもっており、貧しく惨めな現実を生きて行かなければならない人間の宿命を知っている。人間が求めている神は、教義の中で怒り、歎息し、罰する神ではないということを彼は予感していた。そこで遠藤は『深い河』の中で、キリストの姿を英雄

的・男性的なイメージから女性的なイメージへと変えて描く。それは、西洋のキリスト教とは異なる母なる慈愛の神である。弱者である人間の罪を包容する愛の神、遠藤は『深い河』でこのような神の姿を追い求めた。遠藤は、信仰の対象として考えてきたキリストの姿を描きながら、『深い河』の中で登場人物を通じて自分の信仰観を示したのである。その中には有限な人間が無限な永遠を願う祈りが込められているといえよう。

評論家として出発し、小説家となった遠藤は、文学を通じて絶えず自己への確認作業を行ってきた。このような面で、遠藤と宗教の出会いは不可欠であったと考えられる。遠藤はこの作品の中で、宗教の宗派を超越して、生の醜さと悲しみ、善と悪が混在した我々のすべてを包容する神の姿を追い求めている。そして、遠藤はこの作品を通じて、人間の魂の救援を心から望んでいるといえよう。

【参考文献】

<单行本>

Alfred Adler、What life should mean to you、Little Brown、1931

J.P Sartre、Qu'est-ce que la littérature?、Galliamrd、1948

Herbert Read、Collected Essay in Literary Criticism、

Faber and Faber、1950

William York Tindall、The Literary Symbol、Indiana University

Press、1955

Edel Leon、Literary biography、Hart Davis、1957

C.G Jung、Man and his symbols、A Laurel Book、1968

Frye Northrop、Anatomy of criticism、Princeton University

Press、1973

Rene Wellek、Theory of Literature、Penguin Books、1978

Eliade Mircea、images et symbols、Gallimard、1986

G.랑송외、정기주역、랑송 불문학사下、을유문화사、1991

遠藤周作『深い河』（講談社、1993）

遠藤周作『私にとって神とは』（光文社、1983）

遠藤周作『キリスト教』（三省堂、1993）

遠藤周作『『深い河』創作日記』（講談社、2000）

< 論文 >

フランシス・マン、中野記偉訳『遠藤周作とカトリシズム』（清水弘文堂書房、1971）

高橋たか子「モーリアックと遠藤周作」『国文学』2月号（学灯社、1973）

三好行雄・遠藤周作「<対談>文学一弱者の論理」『国文学』2月号（学灯社、1973）

武田友寿「「第三の新人」と戦争—遠藤周作の場合」『国文学 解釈と鑑賞』8月号（至文堂、1973）

田辺保「遠藤周作とカトリック作家」『国文学 解釈と鑑賞』（至文堂、1974）

山田博光『遠藤周作と第三の新人』『国文学 解釈と鑑賞』6月号（至文堂、1975）

利沢行夫「幼少年期の遠藤周作」『国文学 解釈と鑑賞』6月号（至文堂、1975）

高堂要「遠藤周作における弱者の論理」『国文学 解釈と鑑賞』6月号（至文堂、1975）

首藤基澄「遠藤周作の小説の構図」『国文学 解釈と鑑賞』6月号（至文堂、1975）

小久保実「遠藤周作とモーリアック」『国文学 解釈と鑑賞』6月号（至文堂、1975）

遠藤祐「遠藤周作の軽小説」『国文学 解釈と鑑賞』6月号（至文堂、1975）

遠丸立「遠藤における罪と悪」『国文学解釈と鑑賞』6月号（至文堂、

1975)

古屋健三「遠藤周作における留学の意味」『国文学 解釈と鑑賞』 6月号 (至文堂、1975)

佐古純一郎「カトリック作家の問題」『国文学 解釈鑑賞』 10月号 (至文堂、1986)

遠山一行「書評『深い河』」第35巻第29号 (週刊文春、1993)

饗庭孝子「アジア的自然のなかの「愛」」7月号 第1062号 (新潮、1993)

加賀乙彦と遠藤周作「最新作『深い河』 一魂の問題」『国文学』 9月号 (学灯社、1993)

高山鉄男「モーリヤックと遠藤周作」『国文学』 (学灯社、1993)

井上洋治・安岡章太郎・遠藤周作「座談会・「信」と「形」—『深い河』を手がかりに」9月号 (群像、1993)

田中佐二郎「『深い河』(遠藤周作)を読む」(かながわ高校教育の研究、1994)

三木サニア「遠藤周作『深い河』論—復活と転生をめぐる」第17号 (久留米信愛女学院短期大学研究紀要、1994)

兼子盾夫「遠藤周作における神の問題『沈黙』と『深い河』」3月号 第30巻第1号 (湘南工科大学紀要、1996)

_____「日本におけるキリスト教受容の問題」(比較思想研究、1996)

笠井秋生「『深い河』の作中人物 (キリスト教文学研究、1999)

佐藤泰正「『深い河』再読」(キリスト教文学研究、1999)

武田秀美「遠藤周作『深い河』—「多元的宗教観」のテーマをめぐる—」(キリスト教文学研究、1999)

- 遠藤周作 「父の宗教・母の宗教」 『遠藤周作文学全集』 12 (新潮社、2000)
- _____ 「日本的感性の底にあるもの」 『遠藤周作文学全集』 12 (新潮社、2000)
- _____ 「神々と神と」 『遠藤周作文学全集』 12 (新潮社、2000)
- _____ 「カトリック作家の問題」 『遠藤周作文学全集』 12 (新潮社、2000)
- _____ 「私の文学」 『遠藤周作文学全集』 12 (新潮社、2000)
- _____ 「私とキリスト教」 『遠藤周作文学全集』 12 (新潮社、2000)
- _____ 「異邦人の苦悩」 『遠藤周作文学全集』 13 (新潮社、2000)
- _____ 「弱者の救い」 『遠藤周作文学全集』 13 (新潮社、2000)
- _____ 「モーリヤックと私」 『遠藤周作文学全集』 13 (新潮社、2000)
- _____ 「私が愛した小説」 『遠藤周作文学全集』 14 (新潮社、2000)

ABSTRACT

A Study on the 『Deep River』 of Endo Shusaku

Yang, Jeong Hee

Dept. of Japanese Language & Literature

Graduated School of

Sungshin Women's University

Although a novel is said to be the product of fiction, it certainly contains a writer's actual experience or thought. Endo Shusaku would also have influences of his actual experience reflected in his works.

With focus on the fact that he began to approach a religion due to the sense of heterogeneity in childhood and accepted it in the changed form of a medium of literature through life, this study aims at investigating effects of environment and thought as his experience.

Considering that Endo created his literary works as a Japanese literary man believing in Catholicism, this study intends to analyze his internal awareness (effects of experience) reflected in his novel *Deep River* among his many works in connection with the literary theme.

In *Deep River*, Endo pursues God who embraces human life, ugliness, sorrow, and all the other things mixed with good and

evil beyond denomination. For a typical example, he presents the Ganges River as a symbol of "a deep river for all the people." This holy river of salvation is symbolic of love as a river of unchangeable human salvation.

In this work, Endo begins with considering differences between the East and the West in the ideas of belief in search of God who is close to human beings and overflowing with love rather than the target for reverence.

In conclusion, Endo expresses his view of artists and religions in pursuit of Western God as a Japanese in *Deep River* through a medium of literature in the climate of Japan never believing in the one and only God.